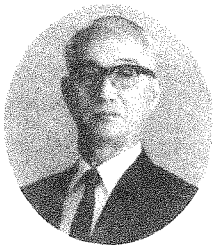

思い出すことども

第７代学校長　　後藤　貞夫

私が芦屋高校に着任しましたのは、昭和41年４月のことでした。それまで勤務していました県教育委員会で学校教育の課長をしていた関係で、当時マスコミを騒がせたＳ君の学校批判の答辞の調査を命ぜられまして、吉田教頭に持って来てもらって手もとに置いてありました。それを持って着任することになろうとは、思いもかけないことでした。その後も当分は、批判をこめた答辞を受け取りましたが、教職員ならびに関係者の皆さんの御協力によって、大過なく勤めることができまして、まことに幸いと思っています。

そのころ、県下の高等学校では、校風樹立ということが重要な目標でした。芦屋高校の歴史は古くありませんでしたが、先輩の努力によって、すでにはっきりした特色を持っていました。その伝統を受けついで、学習とクラブ活動の両立を目ざして行くことが、校風確立の道であると思いました。PTAの賛同と協力を得まして、校風樹立をテーマにしたPTAの研究協議会を開くこともできました。

かつて全国制覇を遂げた野球部の再建も、念願の一つでした。伊東・森木両先生に熱心に指導していただき、私も暇さえあれば練習ぶりを見せてもらったりしましたが、その夢はついに果たすことができませんでした。しかし、毎年いくつかの運動部が全国高校総合体育大会に出場してくれましたので、私もその応援のために、東北地区や中国地区に出かけたことを、楽しく思い出します。

私自身もスポーツが好きでしたので、職員野球部に入れていただき、ユニホームも作って、何度か対外試合にも出してもらいました。また、硬式テニスの好きな先生がたと、生徒の練習の合間をみては、コートで汗を流しました。

教室では、時々ロングホームルームに呼ばれて、いろいろ話をしました。ヨーロッパの教育制度や大学入試方法の話をした記憶があります。また、国語の井上先生が御病気で長期欠勤された際は、補充の間に合うまでの代理を勤めました。二年生の漢文で教材は史記でした。家に伝わる木版本を持って行って、珍しがられたのを覚えています。その時に使ったチョークボックスは、阪部校長のお名前が記入してありました。

いちばん困ったのは、大橋校長が手がけてくださった防音校舎が出来上ったのに、冷暖房装置を動かしてくれないことでした。せっかくの二重窓も、冷房が無くては開けずにおれなくなるし、冬にはダクトから風が入って寒さが加わるわけです。何度も陳情に行きましたが、結局、一夏は数台の扇風機で辛抱させられ、一冬は厚着で我慢するほかありませんでした。現在ではこんな非常識は許されないはずですが、まだ財政が困難だった時代の出来事です。

同窓会には大変お世話になりました。会長はじめ役員の方々が皆さん若かったので、精力的に活動されました。会の名前をつけよとの御注文で、「古事記」のことばを選びましたが、「あしかび」とは水虫のことかと言われたりしたようです。20年あまりたった現在では、もう落ちついたでしょうか。会誌を発行されたのもその頃でした。題字を書かされましたが、それが今も使われていて、懐しいような気恥かしいような思いがします。

初代の山本校長は県外転出ですから特例として、その後は歴代校長が芦屋高校を最終校としておられたので、私もそうなるものと思っていました。ところが、45年３月もおしつまって、学校紛争の処理ということで、急に兵庫高校に転勤を命ぜられたのには驚きました。

芦屋高校もいよいよ50周年を迎えることになって、まことにめでたいことと思います。どうかよい伝統を受けつぎ、それにすぐれた創造を加えて、ますます発展をつづけられるように、心から祈ってやみません。